

異形の神々の森

藤田

泰彦

Yasuhiko Fujita

異形の神々の森 ◆ 目次

夢の 光明化	帰還	移住	叡巫の 塔	来臨	精霊の 店	森の中 に
143	108	101	75	64	20	4

異形の神々の森

森の中に

春の彼岸が終わった頃に、仕事で急遽東北M県の外れにあるM郡へと赴くこととなった。自分の仕事は家屋のリフォームや新築などを請け負うものである。私自身は都下の西東京市支社の所属だが会社の都合というか、折悪しくとでもいうか、M県の中心のS市支社の社員が一人病気で倒れてしまつて、そういう事情から『五輪建装』の横浜本社の意向で派遣的に赴くことになったのである。いわゆる単身赴任でもあるのだが、私はもともとシングルであり身軽な立場でもあるので、そういう次第となつたのであつた。

同僚の小川は、「抜擢だから、会社がそっちの価値をしっかりと認めてくれた訳さ。来年からは係長だな」と言つてくれたが、でもそれは絶対にありえず、私は大学も中退でありこの会社に入ったのは三十四の時点で、以来十五年経ち今は五十間近である。そんな自分が役付きになることはまずないのだが。まあそれは、彼のやさしさによるものでもあるが。もつとも、小川は会社では同期だが歳は六つも下である。が、とにもかくにも、私は東北のM郡に仕事で約三カ月間逗留することとなった。

二つの旅行鞆を携えて東北新幹線でS駅に夜の六時過ぎに着けば、改札口の傍でそこを出這入りする男女を凝視するみたいにして佇んでいる自分と同世代風の人物がいる。改札口を抜けて、ひよつと

してS市支社の係長の山村氏かと想っていると、「そちら様、島崎しまざきさんでしょう」と私に視線を向けて言う。それで、その方が山村氏であることを確認したのであった。

それからはまず、これからの自分の住居にと案内される。それはS駅から車で一時間くらいの割合沿岸部の近くにあるワンルームマンションである。ベッドのほかに狭いがユニットタイプのバスとトイレが備えられており、書き物をするテーブルもある。スタンドも据えられていて、ここでどうにか原稿を書くことはできそうではある。

「島崎さんは本を出されているとか」山村氏は私が出しているのを知っていてか、そんなことを言う。それで、「はい、まあたった二作だけですけどね」と控えめに応じていた。自分はホラー系のものが好きであり、仕事以外の時は、その関係の資料を読んだり原稿を書いたりしている。まあ、ほとんどお金にはならないのだが。が、いずれにせよ、明日からここ東北のM県の外れの場所で三棟の住宅を建てる業務に、補佐的に다가従事することになったのであった。

山村氏は、そのマンションから離れたところあるすし屋で晩を振舞ってくれて、当座の食料として二日分のパンとミネラルウォーターを置いていってくれた。外に出て彼を見送ってから、あてがわれた部屋で本を読む。毎日二時間くらいは神秘学関係の資料を読んでいる。事実、独り者の私は仕事を終えればそんな生活振りである。そういう日頃の習いで一時間半ほど本を読み、歯を磨いてから、瞑想をする。瞑想は日頃の習慣みたいなものであり、必ず一日の始まりと終わりにおのおの二十分は

行^{おこな}っている。それからそこにしつらえられたベッドで眠りに就く。

翌朝、迎えに来た山村氏と一緒に彼の運転するスズキアルトで仕事現場に向かう。

およそ十分で、三棟の家屋の土台が出来ている場所に着いた。これを約三ヵ月で完成に至らせるのであるが。周囲には数人の職人さんがいる。私は名前を告げ、名刺を手渡し、一人ずつに丁寧に一礼して挨拶の言葉を述べる。こういう家屋の建築やリフォーム施工などの業務は職人さんがいて初めて成り立つものであるから、勢い礼を尽くすのである。

それから少し経ってから山村氏は、「あの……、わざわざここ陸奥^{むねのくに}まで来て頂いたのだから、あんまり仕事の方は熱心というか、気を入れてくれなくてもいいですから。それで土曜は職人さんたちも半ドンだから、週休二日として、連休にはここいらの自然を楽しむようにしてはいかがですか」と言う。何か、ふと感じもしたが、山村氏は意図的にそう言っているのかと、そんな印象さえもわずかに受けたのだった……。

が、その日は、取りあえず二時過ぎまでその現場にいて、それからまた彼の運転で自分がこれから利用するあのマンションに向かった。陽のある中で改めて観ればかなり古めのマンションである。昨今ではまだまだ使えそうなマンションでも積極的に壊して、新しく建て替えるという風潮がある。だからこの建物も先は短いかなとも感じた。

だが、とにかく、仕事でこの住居で三ヵ月ほど過ごすこととなった。

「この辺りには食い物屋がありませんので。それで一応冷蔵庫も電子レンジも備えられています、比較的ですが近くに雑貨店がありますから、そこで食料や生活の必需品などを購入されては」と山村氏は言う。何でも、その店は月曜以外は営業しているらしい。

想えば、自分は『五輪建装』に入社して以来、こういう地方での単身赴任という業務は初めてである。いつも中野区にある住居、それはアパートだが、そこから毎日西武線で田無駅前の雑居ビルの二階にある『五輪建装』の支社に赴き、それがもう十五年も経っているのである。これまで二度横浜本社に挨拶に行ったが、主に都内の物件おなどの施工の業務に立ち会ったりしてきたが、こういった地方の仕事するのは初めてなのである。地方に一時的であるにせよ定住するので、勿論この住居費は会社持ちであり、加えて必要経費に多少は上乘せもあるのだが。まあ私は気楽な独身者であり、アマチュアだが著作があることから、今回の地方巡業めいたことを有効に活かせばそれでよいかなどと受け止めてもいるのだが。

そんなことを思っていると、外でエンジンの音がする。山村氏は、「大野君だな」と言い、彼がドアを開ければ程なく三十代半ばくらいの人物が入ってきて、「はじめまして。東京から来られた島崎さんでしょう」と愛想のいい笑みを浮かべ、一礼する。

山村氏の説明では、彼がここまで乗ってきた原付スクーターが私のこの地での乗り物であると。大野氏は、「本当は四輪でもご用意すれば理想なのですが、でも、今は景気がすっかり悪いですからね」

と言い、「この建築現場に来られる際に雨でも降りましたらこれをご利用されては」とヘルメットに雨合羽を差し出す。山村氏は、明日からはこのスクーターで現場に来て頂きますのでよろしく、と丁寧な口調で言う。

そういう次第で、私は仕事をしながらも、余暇に東北の自然を楽しむこととなった。無論仕事の方がメインであるのでそれはある程度ではあるが。

そのマンションに住み始めてから翌々日の、この地での最初の土曜日に、スクーターでそこから出発して、内陸部に向けて都合三十分くらい走った。

だが、何か、不可解だが心に働き掛けるものがあって、それでとにかくスクーターを停める。その辺りでは森が拡がっている。私はそこへと分け入っていった。幸い、細い小道がつけられている。数分ほど進めば、程なく木々がまばらになり、それまでよりも更に細い道がつけられていて、やがて狭いが広場のようなところに来た。そこからまた前のよりも更に細い道がつけられていて、それを辿って十数分くらい経ったか、茶色の小振りの堂宇を思わすみたいな物が建っているところに出る。そこは結構広い広場になっている。

気が付くと、向こうの木々の間に、白髪を腰まで長く伸ばした着物姿の瘦せた小柄な老人が佇んでいる。くたびれたみたいな草履を履いており、さながら昭和の時代に山奥で俗世から身を引いて独り暮らしを貫徹している仙人をも想起させる。そんな印象を抱いているとやがてゆっくりとこちらに近

付いてきて、「どこから来られましたか?」とその独居老人とも思える人物は割と明瞭な声で言う。

彼のそんな問い掛けに、手短に東京から仕事で来て、今週からここM郡に逗留している事を伝えれば、「ああ、そうでしたか。それでは折角こちらに来られたのですから、ここにありませんお堂にお参りされては」と穏和な表情を湛えて言う。私は老人の言葉に、何かそれまでの自我意識が緩やかに森に引き込まれ消えていくみたいになっていつて、同意してしまっていた。

そこにはかなり奇妙な掛け軸があった。茶色の壁に貼られた縦が一メートル半くらいで幅一メートルほどの絵図には、着物を着た立ち姿の三つの蛇の頭を持つ人身の像が描かれている。

「これはあの弁財天様の亜形なのです」と老人は小振りの堂宇内で説明をする。それから「この森は遠い大昔に異形の神々が漂着した土地でもあるのですよ。ですので、ここでは混淆的と申しますか、言わばハイブリッドな神霊が創られてもいくのです。自然と」と言う。

私はその老人が今し方述べた事にいささか驚愕しましたが、比較的だがそういう方面には詳しいので、「そうなんですか……」と如才ない対応をしていた。

「まあ、この森の中の異界と、それはあなた方から見てのものですが、とにもかくにもここ異界の住人である私とこうしてご縁があったのですから、こちらのお堂で少し瞑想などをされましては」と言う。内部には、人工の照明とも違うが淡い光が程良く射している。

それで私はそのの堂宇の床に座ってしばし瞑想をする。すぐに扉は静かに閉められる。

数分くらい経ってから開眼すれば、扉は開けられたらしく、先程の老人が後ろから声を掛ける。

「本日ここに来られたのですから、お仕事がお休みの日に、またこちらに脚を向けられては。この森一帯には、通常の生活ではなかなか体験できないような事柄がかなりありますからね」と言う。私はもともとスピリチュアル系なので、「はあ、そうですね」と多少嬉しいみたいな気持で応じていた。すると、その老人は静かな口調で、

「実はこの森自体が古の神々の棲む異界でもあるのですよ。ですので、こちらに関わった方々は次第に心が変容してくるのですよ。そうして、やがては意識が虚無へと向かっていくのです。そういう作用すらある一帯でもありますので、これまでの暮らしや娑婆での人間関係などに未練があまりでしたら、ここにはあえて参入されない方がよろしいかと想うのですが」

私は生まれて以来全く良い事などなかったので、苦しまずに死ねれば本望、至上の喜びといつも感じてきたのであるが。そんな己でもあるので、その類いの、言わば全ての過去が忘却の彼方に運ばれるようなものは大いに歓迎でもあるのだが。

「あの、私は今建築やリフォームなどを請け負う会社の仕事をしているのですが、これまで人生で良い事は全くなくて、もう五十近いので、いつも苦しむことなく平和な想いを抱いて死ねれば最高であると感じていますので、今し方そちら様が言われた心、意識の変容などがもし出来れば、本当にありがたいのですが」と、思わず眼前で佇む老人に言ってしまうていた。